

吾妻焼から和製ヴィクトリアン・タイルへ

Japanese Tile 2

author 後藤泰男 | Yasuo Goto

ごとう・やすお——LIXIL広報部ミュージアム推進グループリーダー/1959年生まれ。1985年、豊橋技術科学大学物質工学専攻修了。同年、INAX入社。窯業技術研究室、分析センター、常滑東工場でタイル技術開発にかかわる仕事に携わる。2006年、ミュージアム活動推進室のづくり工房の立ち上げを経て、現職。

[クローズアップ・タイル]

吾妻焼——1

日本の近代窯業の育ての親と言われるドイツ人化学者のゴットフリート・ワグネル博士は、明治元年5月、長崎に來日した。その後、美(美術的視野)・用(工業生産)・学(学術的發展)の精神を学生たちに教えるとともに、明治18年には自ら吾妻焼を創業した。下のタイルの日本画を描いた画師は明らかではないが、当時、狩野派(探幽系列)の画家たちが絵付けに参画していたと言われている[明治18-20年頃/156×156×10mm/日本]



[タイルのデザイン]

日本画から西洋モダン——2,3

吾妻焼は明治20年に旭焼へ改称した。この時ワグネルは、「日本の絵画の筆力を失うことなく、陶器に完全に模写し永久に保存すること。そしてこれを外国に輸出すること」(昭和5年窯業技術官会議講演録より)を旭焼設立の目的としている。日本の伝統的な美術や工芸に深い理解を示し、むやみに西洋をまねることを戒めていたワグネルは、日本の伝統を新しい技術で活かすためにタイルを選び、日本画のデザインを「釉下彩」の手法を用いて施した。一方、ワグネルから近代窯業を学んだ弟子たちがつくり上げた色鮮やかな和製ヴィクトリアン・タイルは、西洋のモダンなデザインが施され、暖炉まわりや玄関の床、公共スペースの床やトイレの床などに使用されていた。

2——花鳥文組絵タイル[明治23-29年/750×151×10mm]|3——草花文タイル[昭和初期/152×152×10mm]|いずれも制作地は日本

[タイルのある風景]

離楽庵——4

京都市北区にある喫茶店。元は銭湯として建てられた。装飾性豊かな和製ヴィクトリアン・タイルは、耐火性、耐水性という機能を兼ね備えた建築素材として銭湯などに用いられた。

- 明治維新の後、日本へ滞在する欧米人の住居には、日本建築の“床の間”と比較される西洋建築の“暖炉まわり”や、玄関の床、トイレの床に、輸入したヴィクトリアン・タイルが使用されていた。これを見た日本の設計者たちは、ヴィクトリアン・タイルの耐火性、耐水性という機能性と、その芸術性の高さに注目し、国内でのヴィクトリアン・タイルの生産を望んだ。
- 当時、産業の近代化が進む中で日本のタイル製造技術を向上させたワグネルは、近代窯業を教えるかわら、自身が「吾妻焼」、そして「旭焼」と称したタイルを生産した。さらに新しい技法を積極的に取り入れながら輸入品以上の精巧なタイルを海外に輸出した。そして多くの展覧会で賞を授かり、高官の邸宅を飾り、宮内庁にも献納されたが、ワグネルの死後3年ほどして経営難のために工場が閉鎖された(明治29年)。
- ワグネルから原料の調合、製造技術や窯業技術を学んだ弟子たちが長い間試行錯誤を繰り返し、ヴィクトリアン・タイル調の意匠を模し、転写や浮き彫りなどの装飾をまとった国産のタイル(和製ヴィクトリアン・タイル)が誕生したのは、実に明治40年代のことである。和製ヴィクトリアン・タイルは、明治末から大正初期にかけて多くの西洋建築や銭湯の壁面を美しく飾ったが、大正の中頃になると、装飾性よりもタイルの衛生面が重視され、銭湯などの公衆衛生の場に白色を主体とするタイル張りが普及し始める。さらに昭和2年、大阪府議会在「遊郭のトイレと消毒所はタイル張りにすること」と決議したことをきっかけに、一般家庭でも風呂や台所などをタイル張りにすることが一気に広まった。衛生思想の広がりと共に白色のタイルが人気を集め、タイルといえば真っ白で清潔なものというイメージがこの時から日本人に定着した。
- 「早く、大量に、安く」が望まれた20世紀。衛生的な白いタイルは大量に消費された。21世紀を迎えた今、それらは技術の進歩によって生み出された他の素材に場を譲りつつある。効率や機能を追い求めた時代が終わり、心の豊かさ、生活の豊かさが求められる今、もう一度、装飾の持つ意味を思い出してみてもどうか。日本の絵画の伝統を新しい技術でやきものに注ぎ込もうとした、1人の外国人化学者の努力と理想が詰まった1枚のタイルから、今また、タイルの新しい可能性が見えてこないだろうか。

— ここで紹介しているタイルは「世界のタイル博物館」で常設展示しています。

